

〈研究ノート〉

第一次世界大戦期のドイツの諷刺画における“敵国”日本像

飯 倉 章

はじめに

1914年7月末のオーストリア＝ハンガリーの対セルビア宣戦布告を皮切りに、8月初めにヨーロッパ各国が宣戦布告をして第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟の誼から8月23日にドイツに対して宣戦を布告した。日本陸軍は、9月の初めに山東半島に出兵し、11月にはドイツの租借地であった膠州湾地域を攻略した。また、日本海軍は10月、太平洋赤道以北のドイツ領南洋群島を次々と占領した。本稿の目的は、このように“敵国”となった日本が、当時のドイツの諷刺画においてどのように描かれたのかを詳しく見ながら、諷刺画に表れた第一次世界大戦期のドイツにおける日本・日本人像の特徴を読み解くことにある¹。

1. 研究手法と研究対象

1. 1. 史料収集と分析の手法

本稿では、ドイツの諷刺雑誌、*Simplicissimus*, *Kladderadatsch*, *Wahre Jacob*, *Jugend*, *Ulk* の五誌に掲載された諷刺画を史料として収集した。史料収集の対象期間は、第一次世界大戦の開戦から、休戦（1918年11月）までの時期を当てた。五誌の諷刺画は、一部を除き、いずれもウェブサイトで公開されている。史料収集の段階では、日本・日本人が表現されている諷刺画を広範囲に集めたが、分析の段階では、日本・日本人が脇役に過ぎないものは除外した。それでもかなりの数に上るので、紙幅の都合上、21点に絞り込んだ。絞り込みに際して、特定の傾向のものを排除するといった意図的な操作はしていないが、選択における恣意性を完全に排除してすべての日本関連の諷刺画を同列に扱ったものではないことは付記しておきたい。

¹ 筆者はすでに『黄禍論と日本人』（中央公論新社、2013年）の第八章「甦る黄禍のイメージ——第一次世界大戦」でこの問題を論じているが、本稿ではより詳しく、諷刺画を史料として分析する。なお同書ならびに本原稿の執筆に際しては、石川伊織先生（新潟県立大学教授）より懇切丁寧なご指導・ご助言をいただいた。また、軍事史学会第100回関西支部定例研究会（2014年1月11日）において「第一次世界大戦期のドイツの諷刺画に見る“敵国”日本」と題して研究発表を行った際には、図像の解釈を中心に会員の方々より数多くの示唆とご意見をいただいた。共に深甚の謝意を表したい。

1. 2. ドイツの諷刺雑誌の概要

本稿で取り上げる諷刺画の典故となった五誌について、その概要を述べる。

Simplicissimus は 1896 年創刊で、ミュンヘンで発行されていた²。誌名は 17 世紀ドイツの小説家グリムメルスハウゼン (Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen: ca.1622~1676) の代表作『冒険好きのジンプリチシムス』(邦訳名『ジンプリチシムス』、『阿呆物語』など) の主人公の名前から来ている。「ジンプリチシムス」は大馬鹿者という意味である。日本語での表記は発音に近い『ジンプリツィシムス』とした。『クラデラダッチュ』と共に、当時のドイツを代表する諷刺雑誌と言ってよいだろう。

Kladderadatsch は 1848 年創刊のドイツを代表する諷刺漫画雑誌の一つである³。ベルリンで発行されていた。誌名の意味は、間投詞では「ドタン」「バタン」、名詞では「失敗」「大騒動」といったところである。日本語での表記は『クラデラダッチュ』とした。「ダッチュ」は「ダーチュ」と延ばす場合もあり、また「ダッチェ」とも聞こえるが、子音であることから「ダッチュ」とした。

Wahre Jacob は社会民主党系の諷刺雑誌で、労働者向けである⁴。1879 年創刊で、シュトゥットガルトで発行されていた。誌名は直訳すれば「真実のヤコブ」であり、「まぎれもない本物」といった意味である。Jacob の代わりに Jakob と表記されることもある。発音では「ヤーコブ」であるが、一般には「ヤコブ」であるので、日本語表記では『ヴァーレ・ヤコブ』とした。

Jugend は 1896 年に創刊され、ミュンヘンで発行されていた⁵。この頃のドイツを代表する芸術・文芸の総合雑誌である。諷刺画には保守的な傾向が見られる。雑誌名は「若者」「青春」「青年期」といった意味である。本稿では『ユージェント』と表記する。

Ulk は 1872 年創刊の諷刺漫画雑誌で、ベルリンで発行されていた⁶。誌名の意味は「冗談」「いたずら」である。『ウルク』と表記する。

なお本稿では、ドイツ文字をローマ字で表記し、タイトル、キャプションで強調 (ゲシュペルト。隔字体) に相当する部分はイタリック (日本語訳では傍点) で表した。

それでは具体的にドイツの諷刺画を一点ずつ解説していこう。

² 同誌の諷刺画は <http://www.simplicissimus.info/index.php?id=6> にて検索・閲覧。

³ 同誌の諷刺画は <http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/kla> にて検索・閲覧。

⁴ 同誌の諷刺画は <http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/wj> にて検索・閲覧。

⁵ 同誌の諷刺画は <http://www.jugend-wochenschrift.de/index.php?id=24> にて検索・閲覧。

⁶ 同誌の諷刺画は <http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/ulk> にて検索・閲覧。

3. 日本・日本人像を表す諷刺画

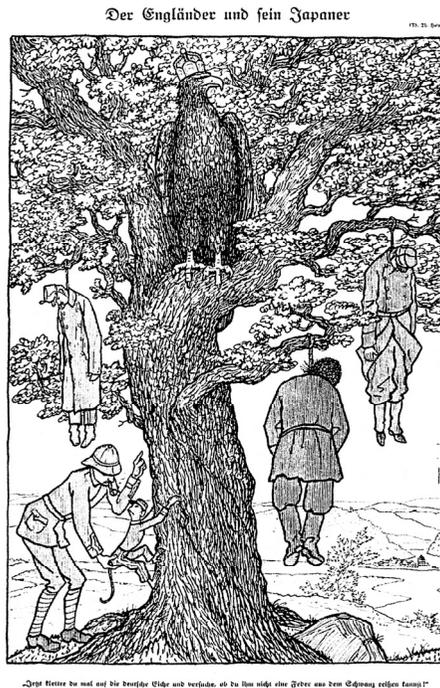


図1 「イギリス人とその子分である日本人」

Thomas Theodor Heine, 'Der Engländer und sein Japaner,' *Simplicissimus*, vol. 19 no. 22 (1 Sept. 1914), 344.

タイトル:「イギリス人とその子分である日本人」。直訳すれば「イギリス人と彼の日本人」となるが、sein という所有冠詞を用いていることから、「子分」というニュアンスが含まれると考える。

キャプション: 樹下のイギリス人が、樹に手をかけた小猿の日本人に語り掛けている言葉。

「さあ、お前さん、ちょっとドイツのオークに登って、やつ [鷲] から尾っぽの羽根の一枚でも引き抜くことができないか、試してみたまえよ」*„Jetzt klettere du mal auf die deutsche Eiche und versuche, ob du ihm nicht eine Feder aus dem Schwanz reißen kannst!“*

図像の分析: 樹下にいるイギリス兵が小猿の日本兵の尻を押しながら、鷲(ドイツ)の尾から羽根を一枚でも引き抜くよう教唆している。しかし、樹の中にはすでに連合国の兵士が吊るされている。真ん中はロシア兵であろう。左右の兵士のいずれか、あるいは両者はフランス兵であろうが、他の連合国の兵士の可能性もある⁷。イギリス兵は樹下の安全地帯にいて、ちょっとやってみないかという感じ

⁷ 軍事史学会の研究会では、右の兵士は制服の形(二列ボタン式の前開きのコート)からフランス兵であろうとのご指摘をいただいた。左の兵士は、軍帽がフランス陸軍のケピ帽(ケピ帽は他国でも用いられているが)のように見えることと、その飾りからフランス兵でないかとも思われる。どちらかがフランス兵であるのは間違いのないしろ、残りの一人がベルギー兵、セルビア兵の可能性もあろうとの指摘もいただいた。

の甘い言葉で日本兵を唆している。イギリスの狡猾さが強調されている。ドイツを象徴する鷲は、堂々としており、戴いた冠の上には小さな十字架も見える。また樹はオークであるが、オークは力・堅忍・不滅の象徴である。ドイツが強いことが示されている

描かれた日本像：作者の意図としては、愚かにも日本はイギリスに教唆されて、強いドイツに挑もうとしているが、返り討ちに遭うだろうということが示唆されている。イギリスに騙されて言うことを聞いているというニュアンスも込めて、日本は小猿で象徴されていると言えよう。また、小猿はいかにも弱そうである。

歴史的なコンテキストと解釈：8月23日の日本の対ドイツ参戦を受けての諷刺画である。日本の参戦過程を見ると、イギリスが参戦要請をしたかと思うとそれを引っ込めたりとちぐはぐな面もあり、必ずしもイギリスの強い教唆があったとは言えない。日英同盟の参戦義務からではなく、日英同盟の誼で参戦したというのが実情である。しかし、いずれにしろ日英同盟があつての参戦であるので、作者の解釈は当時の歴史的な事実の理解からすれば外れているとは言えないであろう。この画には、日英の離間を図るような意図も込められているかもしれない。

日本・日本人ステレオタイプ：イギリスの手下、小猿。

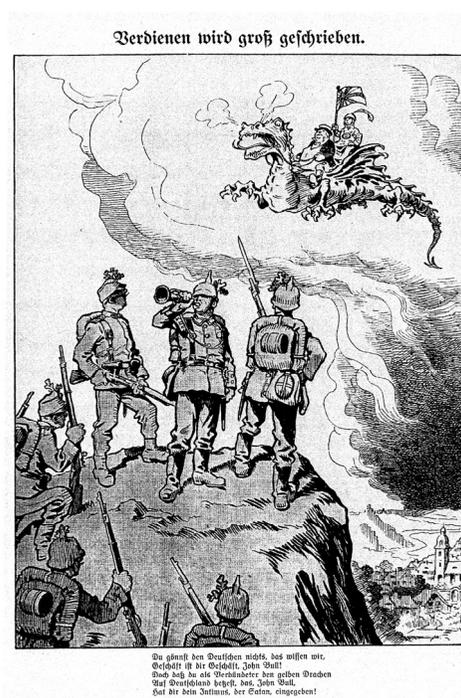


図2 「報いは特筆大書されるであろう」

‘Verdienen wird groß geschrieben,’ *Wahre Jacob*, no. 734 (4 Sept. 1914), 8452.

タイトル：「報いは特筆大書されるであろう」。キリスト教における最後の審判を意識していると思わ

れる。報いを受けるのは、第一にはサタンを親友とするイギリスであろう。

キャプション：韻文まがいの五行。ドイツからイギリスに対するもの。

「お前さんは、ドイツ人に何も与えはしない [何も喜ばせはしない] し、我々もそれは分かっている／そりゃ君、ジョンブルよ、ビジネスはビジネスだよね！／でも、同盟国として黄色い龍を／ドイツに喉けるってこと、そいつをジョンブル、お前さんに／吹き込んだのは、あんたの親友、サタンだったんだね！」 ‘Du gönnst den Deutschen nichts, das wissen wir, / Geschäft ist dir Geschäft, John Bull! / Doch daß du als Verbündeter den gelben Drachen / Auf Deutschland hetzest, das, John Bull, / Hat dir dein Intimus, der Satan, eingegeben!’

図像の分析：空の上で黄色い龍の手綱を握っているのはジョンブル（イギリス）である。その後ろの旗はユニオンジャックのように見えなくもないが、中心が太陽のようにも見えるので旭日旗と解すべきか。あるいは、意図的に両旗を似せさせているのかもしれない。旗を掲げているのは日本人であろう。構図は、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の「ヨーロッパの諸国民よ、汝らのもっとも神聖な宝を守れ！」の図（いわゆる「黄禍の図」1895年、クナックフス作）⁸によく似ており、この図のパロディと言えよう。「黄禍の図」では龍の上に仏陀が乗っていたが、この画ではジョンブルと日本人が乗っている。黄禍の脅威をイギリスが先導し、日本がそれに従っていると見るべきであろう。崖の上には四名のドイツ兵と二名のオーストリア軍兵士（崖の左上）がいる⁹。

描かれた日本像：日本はジョンブルの後ろに控えていて、やはり子分か傭兵のようなイメージである。日本人の姿は必ずしもはっきりと日本を示しているとは言えないが、頭の後ろにたなびいているのはチョンマゲか、それとも帽子の羽根なのかもしれない。黄色い龍の黄色は黄色人種を表しており、黄禍論を想起させる。この場合の黄色い龍は、中国、もしくは日本も含めた黄色人種の脅威と言うよりは、日本単独の脅威を示していると解釈した方がよかろう。

歴史的なコンテキストと解釈：図1同様、日本の対ドイツ参戦を受けてのものである。日本を参戦させたイギリスを、キリスト教における大罪を犯したと非難している。日本はイギリスに従属する存在（従者）のように見える。この点では、大戦を千載一遇の好機と見て日本が積極的に参戦したという、今日知られている歴史的な経緯とは必ずしも一致しない。タイトルとキャプションからすると、イギリスは悪魔の助言で日本を参戦させたキリスト教世界の罪人であるが、参戦した日本はキリスト教世界から見れば異教で異質な存在である。

日本・日本人ステレオタイプ：イギリスの手下、黄禍。

⁸ H. Knackfuß, 'Völker Europas, wahret Eure heiligsten Güter.'

⁹ ドイツ兵は頂に尖った金具がついているピッケルハウベ（プロイセン式軍帽）をかぶっている。勝利の象徴であるオークの葉をつけた軍帽の二人が、オーストリア軍兵士である。



図3 「彼らにはここがふさわしい！」

Olaf Gulbransson, 'Da gehören sie hin!', *Simplicissimus*, vol. 19 no. 53 (1915), 15; 'The Japanese,' *Simplicissimus*, in *Review of Reviews*, vol. 50 (Dec. 1914), 402.

出典について：この諷刺画の出典は、第一次世界大戦初期の『ジンプリツィシムス』誌のプロパガンダ用の別冊子である。掲載されているドイツのウェブサイト上では、差別的表現が顕著であるためであろう、全体的に pdf 化もプリントアウトもできないように制限が施されている。上の画はイギリスの雑誌『レビュー・オヴ・レビューズ』誌に転載されたものである。なお、ウェブサイトによると、出版年は1915年となっているが、これは別冊子をまとめて出版しているためで、先のイギリスの雑誌では1914年12月号に転載されているので、1914年秋には出版されていたと推定するのが妥当であろう。タイトル：「彼らにはここがふさわしい！」。彼ら日本人には、ここ＝動物園の猿の檻の中がふさわしいというのである。

キャプション：提案と画の解説。

「我々は提案する。いまだドイツに居続ける日本人たちは動物園に收容さるべきことを。侮辱されたとチンパンジーから抗議があっても、考慮する要なし」

ドイツのサイトでは、キャプションも簡単に判読できないようにぼかしてあるが、読み取った限りでは下記の通りで、訳もこれに基づく。'Wir schlagen vor, die noch in Deutschland befindlichen Japaner in dem zoologischen Gärten aufzubewahren. Auf dem Protest beleidigter Schimpansen kann keine Rücksicht genommen werden.'

図像の分析：ドイツの動物園の檻の中に、チンパンジーなどの猿と一緒に、日本人も收容されている。服を着ているのが日本人であろう。ネクタイをしている者もいる。中央のチンパンジーは、新参者に戸惑いの表情を見せている。

描かれた日本像：猿と同等か、「侮辱されたとチンパンジー」が抗議するという内容のキャプションか

らすると、それ以下の扱いとも言える。強い人種偏見が伺える。日本人は猿顔で描かれており、ウィングカラーのシャツにネクタイというフォーマルな出で立ちをしていることから、紳士の装いをして
いるが中身は猿だということになる。立ち居振る舞いは猿そのものであり、左上の日本人には尻尾
も見える。これと同様に、猿から見ても日本人は下等というイメージは、太平洋戦争期にも見られた。
アメリカの『在郷軍人会誌』1942年10月号には、檻の中の猿が「我々と日本人とのいかなる類似点
も、まったくの偶然の一致である」と断り書きをする諷刺画が掲載されている¹⁰。

歴史的なコンテキストと解釈：日本の中立維持を期待していたドイツにとって、日本の対ドイツ参戦
は痛手であり、それまで両国が友好的な関係を維持していたことからすると「裏切り」でもあった。
また、日本が近代化に当たってドイツから多くを学んできたことも、この「裏切り」意識を強めたと
言えよう。ドイツに抑留された日本人については奈良岡聰智氏の詳細な研究がある。それによれば、
在独日本人の拘禁が始まったのは、8月20日で23日に両国が交戦状態に入る前であった。拘禁され
た日本人は百名あまりで、医師・医学者・学者・会社員・技師などが多かったため、紳士の出で立ちを
していたこととも符合する。なお、抑留者は1914年末までには全員が解放されたとのことである¹¹。
日本・日本人ステレオタイプ：猿、黄禍。

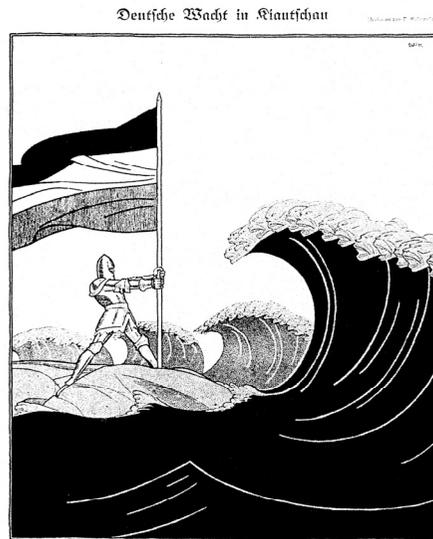


図4「膠州におけるドイツの護り」

Olaf Gulbransson, 'Deutsche Wacht in Kiautschau,' *Simplicissimus*, vol. 19 no. 27 (6 Oct. 1914), 381.

タイトル：「膠州におけるドイツの護り」

¹⁰ ジョン・W・ダワー（飯倉章訳）「風刺画のなかの日本人、アメリカ人——日米関係における暗号化されたイメージ」細谷千博、有賀貞監訳『日米戦後関係史』（講談社インターナショナル、2001年）362頁。

¹¹ 奈良岡聰智『「八月の砲声」を聞いた日本人——第一次世界大戦と植村尚清「ドイツ幽閉記」』（千倉書房、2013年）48～51、366～371頁。なお、イギリスにはドイツ人抑留者がいたが、それらの人々がイギリスから脱出（脱走）する様子を犬の姿で表した諷刺画も、同じ『ジンプリツィシムス』誌に掲載されている。Heine, 'Flucht aus dem Konzentrationslager,' *Simplicissimus*, vol. 20 no. 2 (13 Apr. 1915), 21.

キャプション：なし。

図像の分析：ドイツの騎士がドイツ国旗を真っ直ぐに掲げて、襲い掛かってくる波に対抗しようとしている。波は日本軍であろう。数では圧倒的に不利であるが、勇敢に日本軍の攻撃に立ち向かおうとしている膠州のドイツ軍の姿を示していると言えよう。波の向きは逆であるが、波の形から葛飾北斎の『富嶽三十六景』のなかの「神奈川沖浪裏」のパロディと言えよう。

描かれた日本像：巨大な波の波頭は、よく見ると魚の顔をしている。この不気味な魚面のあまたの怪物は、山東半島に出兵した日本・日本軍兵士を象徴している。「黄禍」という言葉は用いていないが、押し寄せる黄色人種の日本人の群れの脅威を描いており、「黄禍」論をベースにしているものと解釈される。諷刺画自体が退色している可能性もあるが、波頭の魚の頭は黄色に近い茶色に見える。北斎の浮世絵の構図を意識的に使っていることから日本を連想させ、ひねりが効いた一点である。

歴史的なコンテキストと解釈：開戦後、日本陸軍は9月初めに山東半島に上陸し、ドイツの租借地であった膠州湾地域に進攻した。この画が発表されたのは、その最中である。実際にはイギリス軍も日本軍の出兵に続き、日英共同軍は10月31日に総攻撃を開始し、11月7日に青島を攻略した。

日本・日本人ステレオタイプ：黄禍、不気味な怪物。



図5 「高慢なマリアンネ」

Olaf Gulbransson, 'Die stolze Marianne,' *Simplicissimus*, vol. 19 no. 42 (19 Jan. 1915), 550.

タイトル：「高慢なマリアンネ」。マリアンネはフランスの擬人化。

キャプション：マリアンネ（フランス）から日本軍人への言葉。

「あたしのパトロンにならない？ チビのジャップさん。前のパトロンは、ワルシャワでとっても忙しくて手が回らないのよ」‘Willst du nicht mein Beschützer werden, kleiner Japo? Mein früherer ist in Warschau zu stark in Anspruch genommen.’ Japo はフランス語の Japonais をわざと短縮させたと思われる。ここでは一般に知られる日本人の蔑称ジャップに「さん」付けをして訳した。

図像の分析：フランスを象徴する女性マリアンネが、日本陸軍の兵士にロシアの後釜のパトロンにならないかと誘っている。「高慢な」と表現されているように、気位は高そうである。フランスの誘惑にのると代償も高そうであることを暗示しているが、好色そうな日本軍兵士はその気のようにも見える。描かれた日本像：日本軍兵士は小太りの小男で、吊り目、口髭をたくわえ、歯も反っ歯気味で、いかにも好色そうに見える。制服もだぶだぶで、よく見ると軍靴のヒールも異常に高いが、それでもマリアンネとはつりあっていない。

歴史的なコンテキストと解釈：開戦後、東部戦線でロシア軍が苦戦する状況で、連合国側では日本陸軍の欧州戦線への派兵を望む声が高まった。それをマリアンネの誘惑として描いたものである。実際には日本陸軍は、この後も欧州へ派兵することはなかった。この時期には他にも、日本に派兵を促す連合国を皮肉る諷刺画がドイツの諷刺雑誌に掲載された。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、小男、吊り目、口髭、反っ歯、好色。



図6 「アルビオンと『大国民』の誇り高き子孫たち——と日本人教練教官」

Gustav Brandt, ‘Die stolzen Kinder Albions und der “Grande Nation” --- und die japanischen Instrukteure,’ *Kladderadatsch*, vol. 68 no.8 (21 Feb. 1915), 118.

タイトル：「アルビオンと『大国民』の誇り高き子孫たち——と日本人教練教官」。アルビオンはブリテン島またはイングランドの雅称。「大国民」とは、フランス国民を指す。ここではアルビオンも「大国民」も皮肉を強調するために用いられている。

補足説明：タイトルの右に細かい字で補足説明がある。

「マルセイユに 118 名の教練教官の日本人将校が到着した」‘In Marseille sind 118 japanische Instruktionsoffiziere eingetroffen.’

キャプション：日本人教練教官から英仏陣営の将兵への言葉。

「お前ら、ヨーロッパ人種のならず者ども！ お前らにそろそろアジア流の直立不動の姿勢の取り方を教えてやろう！」‘Ihr europäisches Gesindel! Ich werde euch lehren, mal endlich asiatisch stramm zu stehen!.’

図像の分析：右の日本軍教練教官の将校が、左側に並んだ英仏陣営の将兵に直立不動の姿勢の取り方をこれから教えると言っている。英仏の将兵は靴の位置は揃っているが、背の高さや体型、姿勢もバラバラで、肌の色も濃く見える者もいて、不揃いであることが分かる。これは英仏の植民地からの兵士も含んでいることを示していると言えよう。左から四人目のひとときわ背の高い兵士は、タータンのスカートから見てスコットランド兵であろう。

描かれた日本像：軍事教練教官の将校。吊り目、口髭、反っ歯で、だぶだぶの軍服で不恰好に見え、がに股。小男でもあるが、尊大な表情をしている。

歴史的なコンテキストと解釈：イギリスが参戦すると、オーストラリア、ニュージーランド、カナダはイギリスの自治領として参戦義務が生じて参戦した。他にも英仏のアジア・アフリカの植民地軍も、アフリカ人兵士を含めて、戦闘に加わった。そのような事情から、植民地からの将兵も含めて英仏陣営は寄せ集めであるということを作者は強調している。しかも、この英仏陣営の軍に教練を施すのが、アジア人の日本軍将校であるというのである。人種主義的な観点を強調しているとも思われる。タイトルで英仏の将兵を「アルビオンと『大国民』の誇り高き子孫たち」と呼んでいるのは皮肉であろう。西洋諸国＝教師、日本人＝生徒というパターンリスティックな関係が、逆転しているとも言えよう。日本・日本人ステレオタイプ：軍人、吊り目、口髭、反っ歯、不恰好、がに股、尊大。

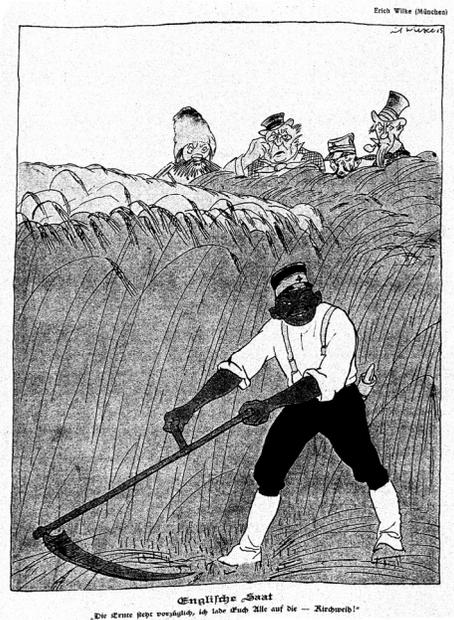


図7「イギリスの作物」

Erich Wilke, 'Englische Saat,' *Jugend*, no. 9 (22 Feb. 1915), 161.

タイトル：「イギリスの作物」

キャプション：日本軍人から、英米仏露に対しての言葉。

「収穫はすばらしい、あなた方みんなをお招きいたしますよ——教会開基祭の大事に！」
 'Die Ernte steht vorzüglich, ich lade Euch Alle auf die --- Kirchweih!'

図像の分析：イギリスが種を蒔いて育てた作物（麦であろう）を、日本軍人が収穫しており、その様子を右からアメリカ、フランス、イギリス、ロシアが手をこまねいて見ている。アメリカは怒っている様子であり、イギリスは困惑しているようである。刈り取りをしているのは、中国での利権と思われる。イギリスが種を蒔いて育ててきた作物＝中国における利権を日本が独占し、刈り取りを終えてから「教会開基祭の大事」には、英米仏露をお招きするということに皮肉が込められている。

描かれた日本像：日本軍兵士は、吊り目、口髭をたくわえ、歯も反っ歯気味で、肌も浅黒い。

歴史的なコンテキストと解釈：第一次世界大戦に乗じて、日本が中国における利権を独占するということを示している。次に見る対華二十一カ条要求から四日後の刊行であるので、それが反映しているかは確言はできないが、いずれにしろ連合国とアメリカに警戒を促す、あるいは日本を自由にさせたそれらの国々を嘲笑する内容である。膠州湾地域を奪われたドイツが、イギリスなども日本によって同じ目にあわされるであろうことを示しているとも言えよう。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、吊り目、口髭、反っ歯、狡猾。



„Ich fresse es ja noch gar nicht, ich zerquetsche ihm vorläufig nur die Rippen!“

図8 タイトルなし

Ulk, vol. 44 no. 9 (26 Feb. 1915), 70.

キャプション：大蛇（日本）から、おそらくは英仏露三連合国への言葉。

「まだ食べようというのではない。さしあたり、あばら骨を砕いているだけだ！」*‘Ich fresse es ja noch gar nicht, ich zerquetsche ihm vorläufig nur die Rippen!’*

図像の分析：日本と記された大蛇が、中国と書かれている兎のあばら骨を砕いている。兎は瀕死の様子である。左側でその様子に驚愕しているのは、イギリス、フランス、ロシアの三連合国であろう。水辺から大蛇が現れていることから、陸はユーラシア大陸なのであろう。

描かれた日本像：巨大で残忍そうな大蛇で、吊り目である。

歴史的なコンテキストと解釈：欧州で戦局が膠着するなかで、1915年1月18日に日本が中国袁世凱政権に突き付けたのが、対華二十一カ条要求である。それはすでに占領した山東省におけるドイツの権益の日本への継承、南満州鉄道の所有期限の延長などを要求するもので、なかでも希望事項とされた第五号では日本人の政治・財政・軍事顧問を招聘することなどを要求し、中国側としては受け入れがたいものであった。この要求は、連合国諸国を困惑させた。そのような事情を反映して、この画では驚愕する三連合国が描かれている。しかし、平時であれば大問題となる日本の過大な要求を、連合国側はあまり問題視しなかった。日本の連合国側からの離脱を恐れたのである。イギリスを代表する諷刺雑誌『パンチ』も、この時期にこの問題に触れていない。一方でドイツにとっては、この日本の突出は、連合国の足並みの乱れを露呈するものであったろう。この対華二十一カ条要求を契機に、ドイツの諷刺画家は日本の「野心」をあからさまに描くことによって、連合国の連携にくさびを入れよ

うとするのである。また中国を大蛇の餌食になる兔のような弱者や被害者として描くことによって、まだどちらの陣営につくとも決めかねていた中国をあわよくば同盟国側につけたいという意図もあったかもしれない。キャプションでは、日本がこれからさらに中国利権を得ようとするということが示唆されている。

日本・日本人ステレオタイプ：大蛇、吊り目、残忍。

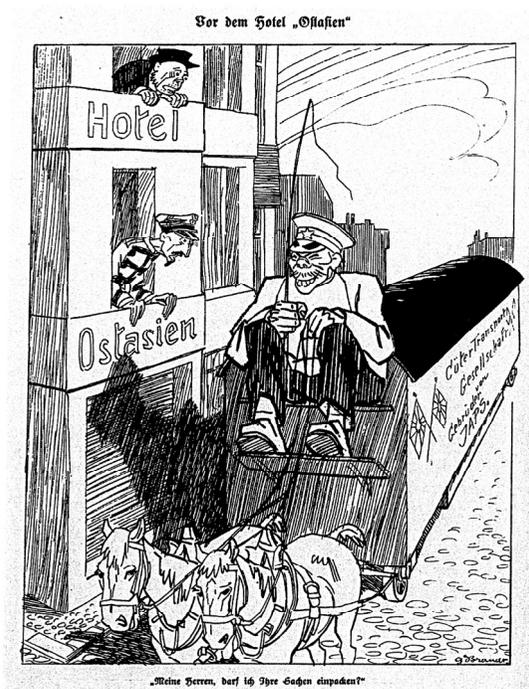


図9「ホテル『東アジア』の前で」

Gustav Brandt, 'Vor dem Hotel "Ostasien",' *Kladderadatsch*, vol. 68 (7 Mar. 1915), 139.

タイトル：「ホテル『東アジア』の前で」

キャプション：御者（日本軍人）から、ホテル東アジアの宿泊客への言葉。

「旦那方、荷造りいたしやしょうか？」 'Meine Herren, darf ich Ihre Sachen einpacken?'

図像の分析：御者は日本軍人。荷車には「JAPS兄弟運送会社（Güter Transport Gesellschaft von Gebrüder JAPS）」と書かれており、同社のロゴマークは交差した旭日旗である。ホテル東アジアで、上の階で御者の様子を驚いて見ているのは、イギリスであろう（ジョンブルを思わせる）。その下の痩せた人物は、おそらくアメリカであろう（アメリカを擬人化したアンクルサムに似て顎鬚がある）。この画には直接中国は描かれていないが、ホテル東アジアが中国であると考えてよからう。馬車の影がホテルをおおっていることが、日本の影響力が東アジアに及んでいることを象徴している。

描かれた日本像：御者の日本軍人は、吊り目、髭、反つ歯である。鞭を手にしているが、上機嫌な顔をしている。それもそのはずで、英米の影響を東アジアから排除できるからである。

歴史的なコンテクストと解釈：日本側の要求提出後、日中は一ヶ月ほどしてからようやく実質審議に入ったが、交渉はすぐに行き詰まった。アメリカは当初、日本に宥和的な姿勢を取ったと言われるが、三月上旬に日本が軍を増派して中国に武力的示威を加えると中国支持に転じ、それがさらに中国側を強硬にさせ、交渉は暗礁に乗り上げた。そのような時期に描かれたものだが、この諷刺画は日本が勞せずして東アジアの利権を英米からも奪うことを示唆していると言えよう。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、吊り目、口髭、反っ歯。



図 10 「その『開かれた』門戸」

Gustav Brandt, 'Die "offene" Tür,' *Kladderadatsch*, vol. 68 no. 12 (21 Mar. 1915), 165.

タイトル：「その『開かれた』門戸」。「いわゆる門戸開放」と意識してもよいかもしれない。

キャプション：なし。

図像の分析：中国風の屋根の門をレンガで日本兵が閉じようとしている。欧米の対中政策の枠組みである門戸開放政策を日本がないがしろにして、中国における利権を独占しようとする動きを示している。門の中の山は富士山のように見えなくもないが、中国と解すべきであろう。

描かれた日本像：日本軍人が、コテを手にしてレンガを積んでいる。吊り目、口髭、反っ歯で、だぶだぶの軍服で不恰好に見え、がに股。小男でもあるようだ。ずる賢さそうな表情をしている。

歴史的なコンテクストと解釈：日中交渉中であるが、日本の要求が門戸開放政策への挑戦であることを示していると言えよう。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、吊り目、口髭、反っ歯、不恰好、小男、がに股、狡猾。



図 11 「東アジアでの [龍を] 屠っての祝宴」

‘Schlachtfest in Ostasien,’ *Ulk*, vol. 44 no. 13 (26 Mar. 1915), 104.

タイトル：「東アジアでの [龍を] 屠っての祝宴」

キャプション：日本軍人から英露への言葉。

「諸君！ 黙って見ているのはよいが、手助けは要らぬ！」 ‘Meine Herren! Zusehen, aber nicht anfassen!’

図像の分析：日本軍人が巨大な日本刀で、龍（中国）にとどめを刺そうとしている。英露は手出し無用と日本軍人に牽制されているが、成り行きに驚きを隠せない様子である。中国は、巨大であるが、目から涙を流し、息も絶え絶えの哀れな龍である。

描かれた日本像：吊り目で反っ歯気味の残忍そうな日本軍人として描かれている。

歴史的なコンテキストと解釈：同じく日中交渉中である。日本の強硬姿勢を傍観するしかない英露への面当てと、中国への同情がうかがえる。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、吊り目、反っ歯、残忍。

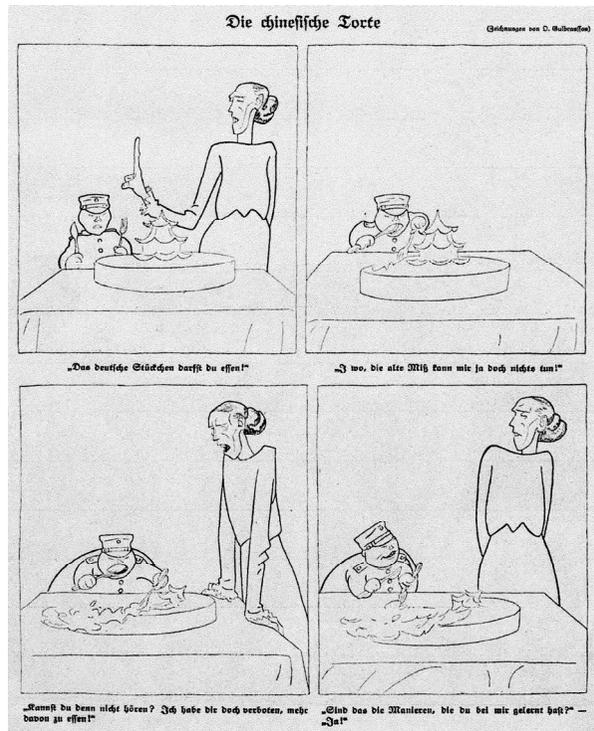


図 12 「中国トルテ」

Olaf Gulbransson, 'Die chinesische Torte,' *Simplicissimus*, vol. 20 no. 2 (13 Apr. 1915), 15.

タイトル：「中国トルテ」。

キャプション：四コマ漫画で日本軍人とイギリス人女性との会話となっている。

（左上）イギリス人女性から日本軍人へ「ドイツの分だけ食べていいわよ！」
 'Das deutsche Stückchen darfst du essen!'

（右上）日本軍人（独白）「とんでもない。オールドミスは、俺にまったく何もできないさ！」
 'I wo, die alte Miß kann mir ja doch nichts tun!'

（左下）イギリス人女性から日本軍人へ「いったいぜんたい、聞いていないの？ だってそのトルテからそれ以上食べるのは禁じてきたのよ！」
 'Kannst du denn nicht hören? Ich habe dir doch verboten, mehr davon zu essen!'

（右下）イギリス人女性から日本軍人へ「それがあなたが私の下で学んできたマナー [手口] なの？」
 'Sind das die Manieren, die du bei mir gelernt hast?' 日本軍人からイギリス人女性へ「はい！」
 'Ja!'

図像の分析：中国を表すトルテを前に、ナイフとフォークを手にした日本軍人がテーブルについている。指示を与えているのは、オールドミスのイギリス人女性である。ドイツの分だけ、中国トルテから食べてよいと言われたにもかかわらず、他の部分まで食べ散らかす日本軍人にイギリス人女性が怒り、教えたはずのマナーを問いただす。しかし、そのマナー（手口という意味もある）はイギリス仕込みなのである。

描かれた日本像：テーブルにつく軍人。顔つきからすると若くて、無邪気。

歴史的なコンテキストと解釈：日中交渉下の日英関係を示している。対華二十一カ条要求のうちのドイツの山東省利権の継承は日本に認めてもよいとイギリスは考えていたが、日本の要求はそれ以上に過大であった。画では、イギリスは日本のエスカレートを抑えようとするが、逆にそれがイギリスから学んだ流儀だと日本に開き直られている。日英両国に対する皮肉とその帝国主義に対する批判になっている。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人。イギリスから帝国主義を学んだイギリスの生徒としての日本。

Japan in China.



Wie Japan seine Kulturausgaben in China zu erfüllen sucht.

図 13 「中国における日本」

‘Japan in China,’ *Wahre Jacob*, no. 750 (16 Apr. 1915), 8648.

タイトル：「中国における日本」

キャプション：画の説明。

「日本が中国に対する文明化の使命を果たそうとする様」 ‘Wie Japan seine Kulturausgaben in China zu erfüllen sucht.’

図像の分析：ドイツ語の「文明 (Kultur)」という言葉には「耕作」という意味もあるので、日本軍人が鞭をふるって中国人二人に犁を引かせている様は、日本が中国に文明化を強いていると解釈できよう。右の中国人は、怒っているようにも見える。日本が中国の文明化において指導的な役割を果たしており、崖の上の連合国、上からイギリス、ロシア、フランスは、この様子をただ見守るしかない。描かれた日本像：鞭をふるう軍人で、髭と反っ歯が見える。中国人に比べると小さい。

歴史的なコンテキストと解釈：日中交渉はまだ妥結していない。連合国は傍観しているように見えるが、日中間の武力衝突も懸念される事態をイギリスは憂慮し、この後、調停役として動き交渉を妥結に導いた。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、口髭、反っ歯、小男、残忍。

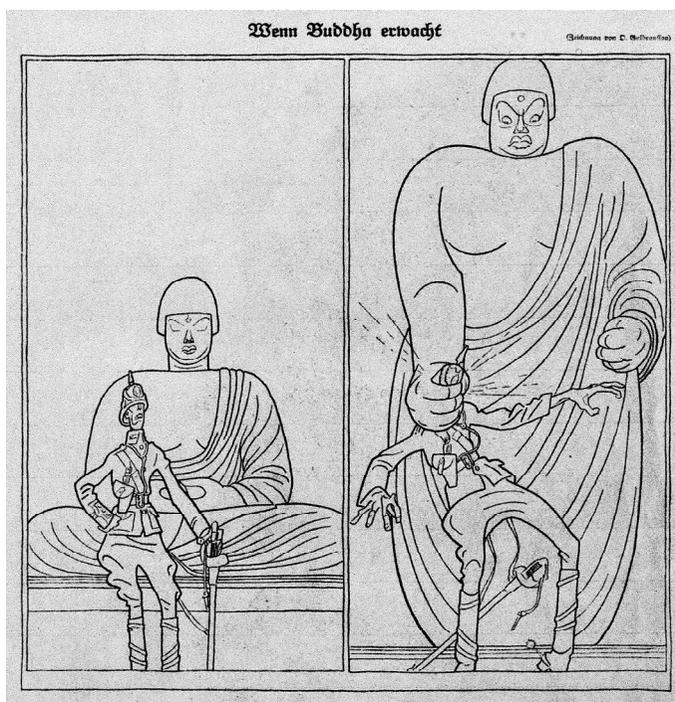


図 14 「仏陀が目覚めたならば」

Olaf Gulbransson, 'Wenn Buddha erwacht,' *Simplicissimus*, vol. 20 no. 3 (20 Apr. 1915), 35.

タイトル：「仏陀が目覚めたならば」

キャプション：なし。

図像の分析：胡坐をかいている大仏（日本）が目覚めて立ち上がり、目の前にいるドイツ兵の顔を後ろから掴んで押しつぶしている。ドイツ兵が襲われる姿をドイツの諷刺画家が描くことに違和感はないが、ピッケルハウベの軍帽と制服からしてドイツ兵であることは間違いないであろう。むしろ、ドイツ兵が斜め前を見て油断している間に、穏やかに座っていた大仏が立ち上がり、巨大で力強い姿を露わにして、後方からいきなりドイツ兵を不意打ちしたという点に強調点があると見るべきであろう。

描かれた日本像：大仏。歴史的に見ると、大仏が日本を象徴するとは必ずしも言えないが（アジア、中国、インドなどを表す場合もある）、この画では日本と見て差し支えないだろう。日本の大仏のなかでは鎌倉の大仏に似ており、左のコマでは、胡坐をかき、印相（手の形と組み方）も鎌倉の大仏に似ている。右肩がはだけている点は違うが、これは二コマ目（右）でドイツ兵を掴む姿を力強く見せる

ためであろう。大仏の眉が吊り上がっていて、ここでも吊り目イメージのヴァリエーションが見える。歴史的なコンテキストと解釈：日本の覚醒がドイツにとって現実的な脅威となることを示していると思われる。黄禍論のヴァリエーションの一種とも考えられる。日本の覚醒、あるいは日本に主導されたアジアの覚醒の脅威を示しており、ドイツ兵が油断している隙に後方から襲われている点には、日本に「裏切られた」という意識も見て取れる。パターンリスティックな日本認識が、裏切られたという見方の根底にはあるのだろう。

日本・日本人ステレオタイプ：強大、不実（裏切り者）、吊り目。



図 15 「中国人の花嫁」

E. D. Petersen, ‘Die chinesische Braut,’ *Simplicissimus*, vol. 20 no. 10 (8 June 1915), 118.

タイトル：「中国人の花嫁」

キャプション：中国人の花嫁の言葉（独白）。

「今ではこんな醜悪な奴と一緒に行かなければ [付き合わなければ] ならないなんて、なんて悲しいことでしょう。だってヨーロッパには、私を崇拝する美しい者たちがたくさんいるのに！」 ‘Es ist doch zu traurig, daß ich nun mit diesem Scheusal gehen muß, wo ich so viele schöne Verehrer in Europa habe!’

図像の分析：中国人の花嫁を日本軍人がエスコートしている。日本軍人は、肩章や勲章から軍高官であると判断される。花嫁は大柄で、高下駄でさらに背の高さが強調されている。一方の日本軍人は、小男で不細工。左手には鍵束を握っている。見るからに不釣り合いなカップルで、中国人花嫁にとって望まない結婚であることは、キャプションでの独白からも分かる。東アジアの通りを進んでいるのは

建物の形や看板で分かるが、看板の文字は漢字に似せているだけでほとんど意味をなしていない。
 描かれた日本像：小男の軍人で、だぶだぶの制服にがに股で不恰好。口髭、吊り目、大きな耳をしている。

歴史的なコンテキストと解釈：日中交渉で、イギリスは調停役として日本に五号要求の取り下げを勧告。日本は五号要求を外して5月7日に最後通牒を發した。アメリカは英仏露の三国に共同干渉を提案したが、三国は拒絶。英露は中国に受諾を要望した。中国政府はやむなく最後通牒を5月9日に受諾。この日（後に7日）を国辱記念日として、記憶に刻むこととなった。この画は、中国政府が日本の最後通牒を受諾したことを受けてのもので、日本がヨーロッパ諸国を押しつけて中国への支配権を強めたことを示している。一方で、中国がそれを望んでいないことは不釣合いな姿とキャプションで表されている。キャプションでは中国人花嫁に、ヨーロッパには美しい崇拜者がたくさんいるのにと嘆かせ、ヨーロッパ諸国が大戦で中国問題に積極的に介入できない状況であることを示している。ヨーロッパ列強の支配の方がましであると言っているようにも解される。日本を醜く、ヨーロッパ諸国を美しいと美醜の対比をしている点は差別的であるが、ある意味で同じアジア人に従属することは屈辱と考える中国人の意識を反映しているとも言えよう。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、口髭、小男、醜悪、不恰好。

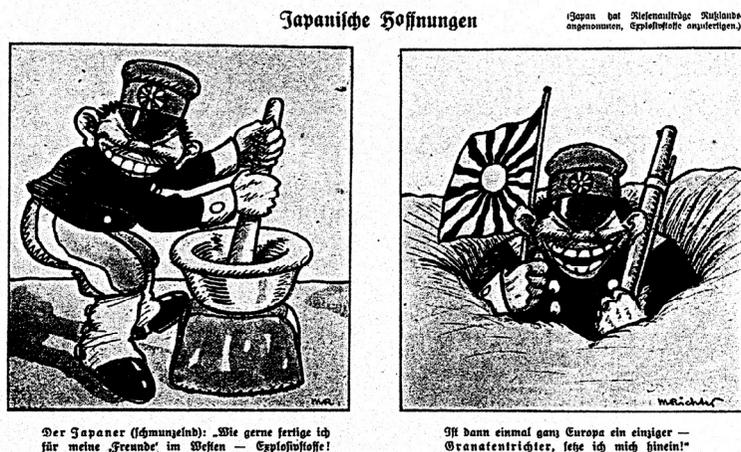


図 16 「日本の望み」

‘Japanische Hoffnungen,’ *Kladderadatsch*, vol. 68 no. 38 (19 Sept. 1915), 593.

タイトル：「日本の望み」

補足説明：タイトルの右に細かい字で補足説明がある。

「日本は、弾薬を供給するというロシアの莫大な注文を引き受けた」‘Japan hat Riesenaufträge Rußlands angenommen, Explosivstoffe anzufertigen.’

キャプション：画の中の日本軍兵士の発言。

(左のコマ)「日本人(ほくそ笑みつつ):西側の『友人たち』のために爆発物を供給するのはなんと楽しいことか」。(右のコマ)「それで、全ヨーロッパが一つの着弾孔になっちゃった日には……その穴の中に潜り込むのさ」*‘Der Japaner (schmunzelnd): Wie gerne fertige ich für meine ‚Freunde‘ im Westen Explosivstoffe.’ / ‘Ist dann einmal ganz Europa ein einziger --- Granatentrichter, setze ich mich hinein.’*

図像の分析:二コマで左から右に読む。すりこぎで爆薬を捏ねてつくっている日本兵。ほくそ笑んでいる。次のコマでは、爆発物の着弾孔になってしまったヨーロッパに日本兵が嬉しそうに入っている。描かれた日本像:吊り目、口髭、反つ歯で、不恰好な兵士として描かれている。左のコマでは捏ねて爆薬を製造。ヨーロッパの大戦という不幸にもかかわらず、爆薬製造を喜んでほくそ笑んでいる。右のコマでは、右手に旭日旗、左手に武器を抱えながら笑っている。狡猾さもうかがえる。

歴史的なコンテキストと解釈:西側からの弾薬供給が途絶えたロシアが日本に弾薬の提供を依頼し、日本側がこれに応じることにしたことを受けてのものであろう。弾薬を供給して、さらに戦火を煽り、疲弊したヨーロッパに侵攻することが「日本の望み」であるとしている。黄禍にも似た脅威としても描かれていると言えよう。

日本・日本人ステレオタイプ:軍人、吊り目、口髭、反つ歯、狡猾、脅威。



Das russisch-japanische Bündnis A. Schmidhammer (München)
„Good by, Zehnden! Leb dich nicht füren, du hast 'nen drofschen, mehr ist mir der Vertrag mit dir nicht mehr wert.“

図 17 「日露同盟」

A. Schmidhammer, ‘Das russisch-japanische Bündnis,’ *Jugend*, no. 31 (22 July 1916), 650.

タイトル:「日露同盟」

キャプション：日本軍人からジョンブルへの言葉。

「バイバイ、ジョンちゃん！ うろたえなさんな。あんたにはお金はたんまりあるんだから、もう、あっしはあんたと組む必要なんかないんだ」‘Good by, Johnchen! Laß dich nicht stören, da hast nen Groschen, mehr ist mir der Vertrag mit dir nicht mehr wert.’文中のnenはeinenの略。mehr ist mir と続く mehr は、nunmehr。

図像の分析：マンモス（ロシア）の鼻先に乗った猿の日本兵が、左下のゴリラのようなジョンブルに向かってコインを恵んでいる。ジョンブルが抱えこんでいるのは、キャプションからすると金袋であろうか（動物の死骸のようにも見えるが）、「ドイツ領東アフリカ」と書かれているようである。左足の足元は「イラク（Irak）」。お尻の下あたりの金袋には「カレー（イギリスの対岸のフランスの都市。Calais）」。図の下の真ん中は、「テッサロニキ（ギリシャの都市。Saloniki）」。イギリスが多方面に戦線を持つ様子がうかがえる。マンモスの鼻にぶら下がっているのは、砲弾と大砲。大砲には漢字に似せた書き込みがあるので、日本からの武器援助と見るべきであろう。

描かれた日本像：猿であるが、帽子が軍帽に見えるので軍人でもある。吊り目、髭、反っ歯も見える。いかにも狡猾そうである。

歴史的なコンテキストと解釈：1916年7月3日、日本はロシアと第四次日露協約を締結した。これは実質的に軍事同盟であり、日露同盟とも呼ばれる。日英同盟がありながらロシアと同盟を結ぶことは、ロシアが同じ連合国ではあるもののイギリスにとっては裏切りであるという攻撃材料をドイツに与えた。この画はそのような事情を背景としており、日本を裏切りをする狡猾な猿の軍人として描く一方で、イギリスも強欲にドイツ領東アフリカを抱え込もうとしているので、両国を揶揄していると言えよう。日本からイギリスに「お金はたんまりあるんだから」と言いながら、日本がコインを恵んでいるのは皮肉なのか、手切れ金なのか。日露同盟により、ロシアが日本から大量の武器を供給されるであろうことは、マンモスの鼻にぶら下がった砲弾と大砲からも予想される。

日本・日本人ステレオタイプ：猿、軍人、吊り目、口髭、反っ歯、狡猾、不実（裏切り）。

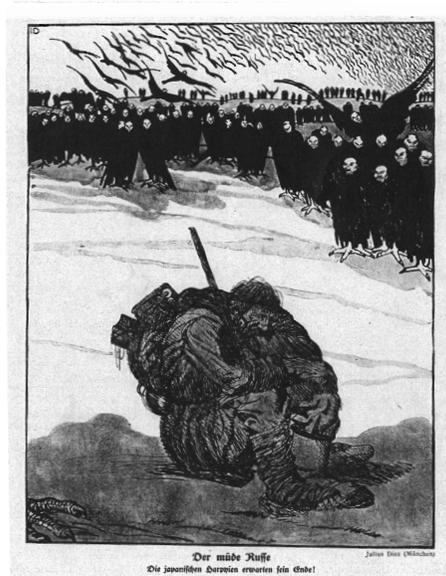


図 18 「疲れ切ったロシア人」

Julius Diez, 'Der müde Russe,' *Jugend*, no. 25 (13 Jun 1917), 500.

タイトル：「疲れ切ったロシア人」

キャプション：画の説明。

「日本のハルピュイアが彼の終わりを持っている！」
 'Die japanischen Harpyen erwarten sein Ende!'

図像の分析：疲れ切った様子で座り込んでいる兵士はロシア兵。それを遠巻きに眺めている無数の怪物は、ハルピュイア（日本）である。左下隅には、その爪が見える。

描かれた日本像：ギリシャ神話に登場する女面女身で、鳥の翼と鉤爪をもつ怪物ハルピュイア。ただし顔は女面ではなく男の顔をしており、吊り目に髭面である。空も覆うハルピュイアが遠巻きにロシア兵の死を待つ姿は不気味である。ハルピュイアは鋭い爪で死者の魂をつかみ、冥府に運ぶと言われる。残忍で狡猾に見える。

歴史的なコンテキストと解釈：戦争で疲弊したロシアでは、国民各層に不満が鬱積し、1917年3月に三月革命が発生した。臨時政府が設立され、戦争継続を決定したが、そのようなロシアの混乱に乗じて日本がロシアを餌食にしようとしていると言うのである。ロシア革命はドイツにとっては東部戦線の負担が軽減され、ロシアとの停戦の可能性も高まったので、奇貨であった。実際、その後の十一月革命で権力を奪取したボリシェヴィキは、紆余曲折はあったものの翌年3月にドイツと単独講和を結ぶのである。ロシア兵の描き方には、敵であるロシアに対する同情さえうかがえるが、この画にはロシアが続戦すれば日本の餌食になるだけであるとして、日本の脅威を利用してロシアを味方につけようという意図もあったかもしれない。その後、日本は、1918年8月にアメリカと共にシベリヤに共同出兵し、ロシア革命に干渉した。

日本・日本人ステレオタイプ：怪物（ハルピュイア）、吊り目、口髭、狡猾、残忍。



図 19 「日本と燃えるヨーロッパ」

Julius Diez, 'Japan und das brennende Europa,' *Jugend*, no. 33 (7 Aug. 1917), 663.

タイトル：「日本と燃えるヨーロッパ」

キャプション：日本人（仁王）の発言。

「我々は『東洋のイギリス人』であるべきか？ ばかげている、何しろ我々は自分自身の家に火をつけたりはしない！」
 'Wir sollen die "Engländer des Ostens" sein?? Blödsinn, wir zünden doch unser eigenes Haus nicht an!'

図像の分析：真ん中において、着物に火が付き助けを求めている女性（顔は男性のようにも見えるが）はヨーロッパ。ヨーロッパを象徴する女神エウロペに擬しているのであろう。その後方で胡坐をかいている三人のうち真ん中の一人は日本人、他の二人は日本人かアジア人の可能性もあろう。金剛力士、仁王を模していると言えよう。三人は、宝剣（真ん中）や錫杖（左右）を手にしている。真ん中の仁王はヨーロッパを見ており、その剣は血塗られている。左隣の仁王（肌の色が濃いので日本人でない可能性もある）は真ん中の仁王の肩に手を置いて話しかけている。キャプションは二人の会話とも解釈できる。右端の仁王も若干黒く、瞑想にふけっているようである。背景には旭日が後光のように射している。

描かれた日本像：仏教の金剛力士、あるいは仁王のように描かれている。髭に吊り目。残忍さ、さらにヨーロッパ対する異教の仏教勢力による脅威（黄禍論のヴァリエーション）もうかがえる。

歴史的なコンテクストと解釈：大戦は勃発後3年となるがいまだに終結しない。戦火で疲弊するヨーロッパを、燃えるエウロペが象徴している。終わりの見えない戦いに救いを求めているようで

ある。一方、日本はその姿を傍観している。キャプションにある「東洋のイギリス人」とは、日露戦争初期によく使われた表現。同盟国同士で、同じ島国でもあり、日本がイギリスをモデルとして多くを学び近代化を果たしたことを表している表現であるが、画ではそのような「東洋のイギリス人」であるべきではなく、自分たちはイギリスのように自分の家（ヨーロッパ）に火をつけたりはしないと日本に言わせている。ヨーロッパの内戦とも言うべき第一次世界大戦の戦争責任がイギリスにあること、同盟国で開戦初期には子分（手下）と見られることもあったイギリスに従属するパートナーとしての日本がそのパターンリスティックな関係から脱したこと、大戦により日本が利していることなどを示している。

日本・日本人ステレオタイプ：仁王、吊り目、髭、狡猾、残忍、黄禍。



Japs und Wilson

„Woodrow, kommst Du zurück von Flandern, meld' Dich bei mir --- zur Nachbehandlung!...“

図 20 「ジャップたちとウィルソン」

Theo Waidenschlager, 'Japs und Wilson,' *Jugend*, no. 44 (22 Oct. 1917), 867.

タイトル：「ジャップたちとウィルソン」

キャプション：日本軍人からアメリカ大統領ウィルソンへの言葉。

「ウッドロー、フランダースから帰ってくる時には、ぜったい私のところに顔を出してくださいよ——後の治療のために」 ‘Woodrow, kommst Du zurück von Flandern, meld' Dich bei mir ---- zur Nachbehandlung!’ 文中の ‘meld’ は ‘melden’ の短縮形。

図像の分析：足回し式の砥石で刀を砥いでいるのはアメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンである。アメリカは1917年4月に参戦しており、さらに大規模な軍事力を投入する構えであることが見て取れる。しかし、砥石の足の一つは何かを積み上げたものの上に乗っており、全体的に不安定に見える。

左端の軍人が日本人で、ウィルソンに話かけている。柵の向こう側にいることが、同じ連合国でありながら陸軍を派兵しなかった日本とアメリカの立場の違いを示している。

描かれた日本像：小男の軍人、図像自体が小さいために顔の表情ははっきりとはしないが、髭面で反つ歯気味のようにも見えなくはない。安全地帯に身を置く狡猾さもうかがえる。

歴史的なコンテキストと解釈：アメリカの参戦により、日米は「兄弟交戦国」となったが、日米間にはアメリカにおける日本人移民排斥の問題と中国問題がくすぶっていた。アメリカにはドイツと戦っている間に日本に背後を突かれるのではという懸念があった。そこでアメリカ参戦の翌月から始まったのが日米間の交渉で、それは1917年11月に「石井・ランシング協定」としてまとまった。この画はその直前に掲載されたもので、キャプションでは、アメリカ軍はフランダース地方（ベルギー北部）から撤退したら、日本に立ち寄って傷病後の治療を受けるようにと日本軍人に言わせている。日本軍人がアメリカが痛手をこうむることを予想している、あるいは望んでいるかのようにもとれる。このように言わせることによって、諷刺画家は日米の離反を画策したとも、日本の脅威をアメリカに警告したとも言えるだろう。「後の治療」が本当の治療を意味するのか、あるいは日本によって止めを刺されることを示唆しているのか、判然としないことによって、不気味さも醸し出されている。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、小男、髭、狡猾、不気味、アメリカに対する脅威。



図 21 「高度な乗馬技術（日中間の協定について）」

Gustav Brandt, 'Höhere Reitkunst (Zum Verträge zwischen Japan und China),' *Kladderadatsch*, vol. 71 no. 23 (9 June 1918), 287.

タイトル：「高度な乗馬技術（日中間の協定について）」

キャプション：ジョンブルからアメリカ大統領ウィルソンへの言葉。

「ジョンブル：ねえ、ウィルソン、思うんだけど、あの野郎は俺たちの黄色の馬を盗んだんじゃないかい」*‘John Bull: Du Wilson, ich glaube, der Kerl stiehlt uns unseren Falben.’*

Falbe は「河原毛色の馬」であるが、falb という形容詞「灰色がかった黄褐色の」から来ているので、黄色人種を示唆する「黄色の馬」と訳した。

画像の分析：日本軍人が大男の中国人の上に肩車で乗っている。日本人は手綱と鞭を持っており、英米の元から中国人を走り去らせようとしている。中国人は、全体的には馬のように見えないが、顔は馬面で、痩せて背が高い。辮髪の太った大男として描かれることの多い中国人ステレオタイプと比較すると、「黄色い馬」に近いと言えよう。手が不気味である。右端にいるアンクルサムがアメリカで、キャプションからするとウィルソン大統領。大統領に話しかけているのが、ジョンブルである。

描かれた日本像：軍人の小男で、吊り目で反っ歯気味。肩車で乗った中国を、手綱と鞭で巧みに操っているように見える。狡猾で、英米を裏切る不実さも示されている。

歴史的なコンテキストと解釈：ドイツが西部戦線で大攻勢をかけ、連合国がそれに対抗していた 1918 年 5 月、日中は陸軍、次いで海軍間で、共同防敵軍事協定を締結した。この画はこの協定を受けて描かれたもので、日本が中国を指導し、英米がそれを座視せざるを得ず、英米が自分たちの中国利権を日本に奪われたように感じていることを示している。ドイツの諷刺画家は日中間の協定をこのように描くことによって、英米と日本の離間を画策、あるいは連合国間の足並みの乱れを嘲笑したとも言えよう。また日本が中国を鞭と手綱で巧みに操る様は、黄禍論も惹起させる。

日本・日本人ステレオタイプ：軍人、小男、吊り目、反っ歯、狡猾、黄禍、不実。

3. 2. 諷刺画の概要

前節で紹介した諷刺画 21 点の雑誌別・作者別の点数は、以下の通りである。

『ジンプリッツィシムス』7 点 (Gulbransson, 5; Heine, 1; Peterson, 1)

『クラデラダッチュ』5 点 (Brandt, 4; 不詳, 1)

『ヴァーレ・ヤコブ』2 点 (不詳, 2)

『ユーゲント』5 点 (Diez, 2; Wilke, 1; Schmidhammer, 1; Weidenschlager, 1)

『ウルク』2 点 (不詳 [同一人物], 2)

なお不詳には、署名が正確に読み取れなかったものも含む。作者数は 11～12 名である。

4. まとめ——日本・日本人像の特徴

これらの 21 点のドイツの諷刺画においては、どのような日本・日本人像が見られ、その特徴はどのようなものであったろうか。

まず日本・日本人は軍人、それもだぶだぶの制服で不恰好な小男の軍人として描かれることが多かったと言えよう。猿の日本軍人も含めれば 15 点に及ぶ。容貌としては、吊り目、口髭、反っ歯といった

特徴が見られる。なお 21 点中、4 点を占める諷刺画家グスタフ・ブランド（Gustav Brandt）の作品では、同じような日本軍人像が繰り返し描かれているが、そのことを差し引いても容貌・容姿に共通の特徴のある日本・日本人像が、複数の画家によって描かれていたことが分かる¹²。不恰好で小男、吊り目、口髭、反っ歯の軍人という日本・日本人像は、ある程度ステレオタイプ化されてドイツの諷刺画に表れていると言えよう。それではなぜそのような軍人なのであろうか。一つには交戦国として軍事的なイメージが読者にも受け入れやすかったことがあろう。また、欧米主要国のようにイギリスならばジョンブル、フランスならばマリアンネ、アメリカならばアンクルサムといった、擬人化された定番の日本・日本人像が存在しなかったことも理由として挙げられるだろう。

軍人以外では、猿、もしくは猿を連想させるイメージが 3 点あった。また先の日本軍人の容貌のうち反っ歯も猿を思い起こさせる。猿イメージも浸透していたと見るべきであろう。歴史的に見ると猿イメージは、たとえばイギリス人がアイルランド人を侮蔑するときにも用いられており、日本だけに当てはまるものではないが、この時期に出ていることは留意すべきであろう。

他には、大仏、仁王といった仏教的なイメージや、魚面の怪物、ハルピュイア、大蛇があるが、これらも一様に吊り目であったり、反っ歯であったりしている。

それでは外見的特徴を離れて、行動特性や性格面からはどのような日本・日本人像が見受けられるであろうか。すべてに当てはまるものではないが、多くの諷刺画で不実（裏切り）・狡猾・残忍といったイメージが強調されている。このようなイメージの形成には、日本の政治・軍事的な行動が反映しているとともに、以前からあったイメージや人種主義的な見方が日本の行動により喚起された側面もあると言えよう。次には、個々の歴史的な推移とこのような行動特性や性格面での日本・日本人ステレオタイプの間を概括してみよう。

まず参戦直後には、日本を同盟国イギリスの子分（従属者）と見なして、イギリスに唆されて、あるいはイギリスのせいで参戦したという見方があったことには留意すべきであろう（図 1・2）。日露戦争期にも、日露戦争をイギリスの代理戦争とする見方があった。第一次世界大戦中にドイツの諷刺画家は、敵国イギリスを「不実なイギリス」（perfidious Albion）として描いたが、そのようなイメージの延長に、同盟国日本も位置づけられたと言えよう。しかし、戦争が進むにつれてそのようなイギリスに従属するイメージは消え、むしろイギリスを困惑させる、あるいは日露同盟の締結に見られるようにイギリスから離れ、場合によってはイギリスに日本が敵対するであろうという将来予測も現れた。これにはドイツの諷刺画家の日英の離反を煽る意図もあったろうが、日本がヨーロッパ全体の敵となるという予測は、イギリスを始めとする連合国側にも共有可能な認識であったとも言えよう。

連合国側をもっとも困惑させたのが、1915 年 1 月の対華二十一カ条要求であったことは疑いない。逆に、それはドイツにとって連合国陣営の足並みの乱れを指摘する願ってもない機会であり、実際にこの時ほど、日本が主題としてドイツの諷刺雑誌を賑わしたことはなかった。ここで付与された日本イメージの一つは、残忍さである。実際に軍事紛争があった訳ではないのに、中国を締め殺す、ある

¹² 最多の 5 点を占めたのはオラフ・グルブランソン（Olaf Gulbransson）であるが、彼は様々なモチーフとデザインを用いて、日本人を描き分けている。

いは中国に止めを刺すような存在として日本の残忍さが強調された。中国での利権を独占しようとする日本と、被害者としての中国という構図がここには見られる。一方で、日本の軍事力を当てにしていた英露仏が、当惑しながらも日本の対中要求に介入できないでいる姿も多く描かれた。英露仏の弱みにつけこんだ狡猾さも、この時期に強調されたと言える。

また、日本に助力を求める連合国を嘲笑うようなイメージも多く見られたが、これは西洋に倣って文明化を果たした文明の「生徒」日本に、今ではかつての「教師」ヨーロッパ列強諸国が助けを求めるといふ、パターンリスティックな関係の逆転を笑ったものである。しかし、そのようなパターンリスティックな見方は、日本の師を自認していたドイツにも根強く存在しており、それは日本の参戦によって裏切られたという感情に転化したとも言えよう。裏切りをする不実な日本といったイメージや、日本人を猿以下に扱うような激しい人種差別的な感情の発露も、そのような文脈から理解できよう。ヨーロッパの内戦とも言うべき大戦を狡猾に利用する不実な日本というイメージは、実際には敵味方を問わず、ヨーロッパ列強に浸透したのかもしれない。

一方で、参戦当初から通奏低音のように日本イメージの根底に流れ続け、時として惹起されたのは、黄禍論とそれに触発されたイメージである。第一次世界大戦への日本の参戦と日本による中国支配強化の動きは、黄色人種の連合の脅威である黄禍論を想起させるのに十分であった。また、覚醒する大仏として、あるいはヨーロッパの「内戦」を傍観する仁王として、日本単独でも、ヨーロッパへの軍事的脅威として描かれたが、その下敷きにも、ヨーロッパを襲い支配する黄色人種の群れという黄禍の脅威に由来するイメージがあったとも言えるのではなからうか。

【参考文献】

- 有賀貞『国際関係史 16世紀から1945年まで』（東京大学出版会、2010年）
千葉功『旧外交の形成 日本外交一九〇〇～一九一九』（勁草書房、2008年）
ダワー、ジョン・W（飯倉章訳）「風刺画のなかの日本人、アメリカ人——日米関係における暗号化されたイメージ」細谷千博、有賀貞監訳『日米戦後関係史』（講談社インターナショナル、2001年）
テイラー、A・J・P（倉田稔訳）『第一次世界大戦』（新評論、1980年）
中埜芳之、楠根重和、アンケ・ヴィーガンツ『ドイツ人の日本像 ドイツの新聞に現われた日本の姿』（三修社、1987年）
奈良岡聰智『「八月の砲声」を聞いた日本人——第一次世界大戦と植村尚清「ドイツ幽閉記」』（千倉書房、2013年）
西川正雄『第一次世界大戦と社会主義者たち』（岩波書店、1989年）
平間洋一『第一次世界大戦と日本海軍——外交と軍事との接続』（慶應義塾大学出版会、1998年）
義井博『カイザーの世界政策と第一次世界大戦』（清水書院、1984年）
Cecil, Lamar. *Wilhelm II, Emperor and Exile, 1900-1941*. Chapel Hill, NC and London: Univ. of North Carolina Press, 1996.

- Douglas, Roy. *The Great War: The Cartoonists' Vision*. London: Routledge, 1995.
- Gollwitzer, Heinz. *Die gelbe Gefahr: Geschichte eines Schlagworts Studien zum imperialistischen Denken*. Göttingen: Vondenhoeck und Ruprecht, 1962. 邦訳、ハインツ・ゴルヴィツァー（瀬野文教訳）『黄禍論とは何か——その不安の正体』（草思社、1999年、中央公論新社、2010年）
- Hillier, Bevis. *Cartoons and Caricatures*. London: Studio Vista, 1970.
- Hünig, Wolfgang K. *British and German Cartoons as Weapons in World War I: Invectives and Ideology of Political Cartoons, a Cognitive Linguistics Approach*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2002.
- Lehmann, Jean-Pierre. *The Image of Japan: From Feudal Isolation to World Power 1850-1905*. London: George Allen and Unwin, 1978.
- Littlewood, Ian. *The Idea of Japan: Western Images, Western Myths*. Chicago: Ivan R. Dee, 1996.
- Nish, Ian. *Alliance in Decline: A Study in Anglo-Japanese Relations 1908-1923*. London: Athlone Press, 1966.

The image of 'enemy' Japan in German caricatures during World War I

Akira Iikura

Abstract

Several weeks after the outbreak of the Great War in Europe in 1914, Japan declared war against Germany on 23rd August, sent troops to Shantung Peninsula in China in September, and occupied the German leased Jiaozhou Wan area in November. The Japanese navy also captured the German South Sea Islands in the Pacific in the early stage of the war. In this way, Japan became an 'enemy' of Germany. This essay tries to clarify how Japan and the Japanese were described in German political caricatures and reveal the stereotyped image of Japan as an 'enemy' of Germany during the war. An ugly little officer or man with slanted eyes, a mustache, and buck teeth was the one stereotype. The Japanese were also shown as monkeys, snakes, huge Buddhas, Deva kings or groups of harpies and fish-like monsters. The stereotyped natures of Japanese were treacherous, cunning and cruel. Underlying these images was the fear of the yellow peril and the paternalistic views of Germans toward Japan before the war.